

# レミーのおいしいレストラン

2007(平成19)年7月5日鑑賞(角川映画試写室)

★★★



監督・脚本=ブラッド・バード/声の出演=パットン・オズワルト/ルー・ロマーノ/イアン・ホルム/ジャニン・ガロファロー/ブラッド・ギャレット/ピーター・オトゥール/ブライアン・デネヒー/ピーター・ソーン (ブエナ ビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給/2007年アメリカ映画/117分)

……人気テレビ番組『料理の鉄人』がなくなった今、今年の夏の「おいしい映画」は、是非これで……。レミーが天才シェフと呼ばれたのは、天性の味覚と嗅覚を備えていたため。しかし、レミーは人間が忌み嫌うネズミだった！ 人間とネズミとの協力関係を築く気の弱い主人公とそれを支えるしっかり者の女性。そんな奇妙な「三角関係」が生み出すファンタジーはスリル満点のストーリー展開で、親子共に楽しめるもの。意外に貴重な教訓(?)を含んだハッピーエンドも、お楽しみに……。

## 第4章

味わい深さはワイン以上?

### 全米オープニング No.1!

『レミーのおいしいレストラン』は、ディズニー/ピクサーが『モンスターズ・インク』(01年)、『ファインディング・ニモ』(03年)、『Mr. インクレディブル』(04年)などの大ヒットアニメに続いて放った最新作。夏休みに公開されて、大人も子供も楽しく観ることができるこれらの作品はいつも大ヒットしているが、日本に先駆けて6月29日に全米3940館で公開された『レミーのおいしいレストラン』は、オープニング3日間の興行収入は4722万ドルという圧倒的な成績を記録し、全米No.1でスタート!! とのこと。私はこの手のアニメは嫌いではないが、鑑賞順位はどうしても後になっていたが、今回はタイミングよく時間が空いたため試写室へ。さて、その結果は……?

## 米仏の友好回復に絶好……？

ブッシュ大統領が主導したイラク戦争に対して、フランスのシラク大統領は強く抵抗したが、去る5月6日の大統領選挙で左派のロワイヤル氏を破った右派のサルコジ大統領は、公約として掲げている政策を見てもアメリカ寄り……？

他方、大ヒット確実なディズニー／ピクサーのアニメ大作の、テーマを料理としたうえ、その舞台をあえてフランスのパリに持っていったことは、アメリカにとっては大譲歩……？ だってそれは、アメリカ人が「グルメはやはりフランス」、そして「グルメの都はやはりパリ」と認めたことになるのだから……？

小難しい映画が大好きな理屈の多いフランス人に対して、いかにもアメリカ的なこのファンタジー大作がどこまで受け入れられるかわからないが、少なくともフランス人はアメリカがそこまで譲歩していることを理解しなくては……？

そんなわけで、私としてはこの映画が米仏の友好回復に役立つことを願うとともに、フランスでの興行収入に特に注目しなければ……。

## 天才レミーとその愛読書は……？

レミー（パットン・オズワルト）は、ネズミ一族の長ジャンゴ（ブライアン・デネヒー）の次男坊だが、味オンチの兄エミール（ピーター・ソーン）と違い、天才的な嗅覚と味覚の持ち主で料理の天才。そんなレミーの愛読書はパリ1番の高級レストラン「グストー」の名シェフ、グストーが書いた『誰でも名シェフ』。といってもレミーにとっては、その内容もさることながら、何よりもそのタイトルが気に入ったのでは……？ なぜなら、レミーは本気で自分が人間社会の中に入り込み、そのタイトルどおり、名シェフになれると信じていたのだから……。

ほとんどの人間が忌み嫌うネズミが人間の世界に入り込んだうえ、天才シェフに。そんなバカな、と思う発想を逆転させたのがこの映画の最大のポイント。ネズミと人間との調和と共存、そしてグルメをめぐる人間社会の確執、そんな壮大なストーリーがどんな面白いキャラクターたちによって描かれていくのだろうか……？ そして、この手の映画には当然のことと予定されている、観客の誰もが幸せになれるハッピーエンドは……？

## 創業者亡き後の2代目は……？

今年6月の株主総会はブルドックソースの企業買収防衛策の導入をめぐる注目を集め、とにもかくにも株主総会の「活性化」が実現した。他方、テン・アローズ（旧シャルレ）や吉本興業そしてサンヨーなどでは、創業家と現経営陣との確執という面白い人間ドラマが表面化された。

このファンタジー映画『レミーのおいしいレストラン』でも、レストラン「グストー」の料理長グストーの死亡後、その後を継いで料理長となったスキナー（イアン・ホルム）の経営ぶりが大問題に……。すなわち、小心者で疑り深い彼は、グストーのレシピを実践しないばかりか、もうけ主義に走り、冷凍食品を使った料理を提供する始末……。こんなに創業者の意思を無視した2代目では、「グストー」の価値が下がるのは当然。さてレストラン「グストー」の行方は……？

## シェフと料理評論家の力関係は……？

日本でかつて大人気を誇ったテレビ番組が『料理の鉄人』。聞くとおもしろい、このアメリカ版が今アメリカではやっているらしい……。それはともかく、これはたしかに楽しい番組だった。しかし、視聴者によくわからないのが、その採点方法。料理評論家の○○氏や芸能界で料理好きで有名な△△氏らが審査員として登場し、鉄人と挑戦者の各料理を味わった後、少しコメントをして採点するわけだが、これにどこまでの客観性と正当性があるのかは疑問……？

そう思っていると、この映画には、フランス料理界で最高の権威を誇る料理評論家イーゴ（ピーター・オトゥール）が登場する。彼は「愛せない食べ物は飲み込まない」を信条とする徹底した美食家だから、「誰にでも料理はできる」というグストーの主張と真っ向から対立することに……。ギド・ミシュランによるホテル・レストランの格付け（赤ミシュラン）は世界的な権威だが、フランスの料理評論家イーゴの採点がどこまで影響力をもつのかは不明。しかし、この映画ではその影響力は大きいようで、彼の酷評によって「グストー」は5つ星から降格。何でもこのことが、グストーの命を縮めることになったらしいから採点は慎重にやらなければ……？

## ちょっと頼りない主人公は今風……？

「今ドキの若い者は……」という言い方はいつの時代でも共通するものだが、平和で豊かな62年間を歩みながら21世紀に入ったわがニッポン国では、特にそれが妥当するのでは、と私は考えている。フリーター、ニートという言葉が定着し、他人とのコミュニケーションと自己表現のできない若者が横行し、家庭と学校の崩壊が進んでいる日本では、周りを見渡せば若い男の子はちょっと頼りないヤツばかり……？

それに対して自己主張の強いフランスの若者はデモや暴動が大好き(?)で、彼らのパワーが83.97%という大統領選挙の高い投票率を支えていると私は思っていたのだが、意外にもこの映画の主人公リングイニ(ルー・ロマーノ)は、気の弱い青年。紹介状を手に、レストラン「グストー」の2代目料理長スキナーの元を訪れたリングイニだったが、残念ながら彼には料理の才能は全くなし。したがって、そんな男はゴミ処理の仕事しかできないのは当然。

しかし、この映画は今の時代にふさわしく(?)、結果的にそんな弱者、負け組に光をあてることに……？そしてそれが、人間とネズミの共存と協力体制によって、というところがミソ。すなわち、リングイニは自分が弱者だったからこそ、ネズミの天才シェフ、レミーの才能を理解し互いに協力することができたのだという教訓を含ませているわけだ。私はこの手の考え方にはあまり賛成できないが、とにかくそんな主人公のキャラの設定がこの映画のミソ……？

## 頼りない男にはしっかり者の女が……

他方、頼りない男にはしっかり者の女がつくというのも万国共通の法則で、この映画ではそれが、「グストー」唯一の女性シェフのコレット(ジャニーン・ガロファロー)。クビになりそうなリングイニをとりなした縁で、コレットはスキナーからリングイニの教育係を押しつけられたが、決してこれはコレットにとって望ましい仕事ではなかったはず。しかし、コレットはリングイニに対して、シェフのイロハを機関銃のようなスピードで教え込んだ。これは、自分に与えられた任務を忠実に果たそうという彼女の人生観にもとづくもの。

料理は意外と肉体労働だから、女性シェフはまだまだ少なく、料理界は男の世界。したがって、ただ1人女性シェフとして男社会の中で頑張っていたコレットにとって、

コレットの話最後まで聞いてくれたのはリングイニ1人だけだった。それは、自分の弱さを自覚しているリングイニだからこそできたわけだが、かくして気の強いしっかり者のコレットと、気の弱い頼りないリングイニの心と心が結びつくことに……。

## 成功すると内部分裂が……

リングイニとレミーの協力体制は絶対誰にも知られてはならないもの。なぜなら、「グストー」の調理場にネズミが入り出していることがわかれば、「グストー」はたちまち営業停止処分を食らうことになるのは明らかだから。

そんな秘密を抱えながら、リングイニがつくり出す料理の評判は高まるばかり。しかし、そんな成功の陰に隠れていたものの、賞賛の声を一身に浴びるリングイニといつになってもあくまで日陰者のレミーの間にはギクシャクした関係が……。さらに、今やリングイニとコレットは恋人同士になっていたから、リングイニがレミーよりもコレットの指示に従おうとしたのは、ある意味当然。

こんなリングイニを頂点としたコレットとレミーの三角関係になれば、それをバランスよく維持していくことは到底ムリで、いつの間にかその崩壊が迫ってくることに……。もっとも、成功すれば内部分裂が起こるのは世の常だから、それも仕方ないのだが……？

## イーゴとの大勝負の行方は……？

この映画のハイライトは、自分の採点で降格させたにもかかわらず、客が「グストー」に押し寄せていることに決着をつけるべく、イーゴが再び「グストー」に乗り込み、リングイニと対決するストーリー。レミーに指示されたとおりの料理を提供すれば勝てる見通しはあるのだが、今やリングイニとレミーとコレットの正常な「三角関係」は既に機能しなくなっていた。しかも、「グストー」で働くたくさんの料理人に対して、最高のレシピの秘訣はネズミのレミーにある、とバカげた告白と訓示をしたリングイニを、料理人たちが見限ったのは当然。その中には愛するコレットまでも……。そんな中、対決心をメラメラと燃やしながらイーゴが「グストー」のテーブルに……。さあ、リングイニとイーゴとの大勝負はどうなるのだろうか……？

## どんなハッピーエンドに……？

この手のファンタジー映画のラストは、ハッピーエンドに決まっている。そうでなければ、子供を連れて映画館にやってきた親子連れが、鑑賞後明るい気持で家路につくことができなくなってしまうから。リングイニとイーゴとの勝負がどうなるのかをここで書くわけにはいかないから、それはあなたの目でじっくりと……。

他方、リングイニの大躍進によってホントの負け組となってしまったスキナーは、リングイニの能力に疑問をもち嗅ぎ回った結果、判明したのがリングイニとレミーとの協力関係。すなわち、「グストー」の料理は、実質的にネズミの天才シェフであるレミーによって成り立っているという重大な秘密を握ることになったわけだ。そんな場合、次のスキナーの行動は、悪知恵の働くあなたなら、すぐにピンとくるはず……？

雪印乳業やミートホープも、その「偽装」が発覚したのは内部告発（タレ込み）から……？ すると、パリ1番のレストラン「グストー」の料理長がネズミと協力していると内部告発されたら……？

そうなれば悲劇的な結末となってしまいが、さて映画はそれをどのようなハッピーエンドに……？ それも、あなたやお子様自身の目でしっかりと……。

2007(平成19)年7月6日記